

働きつつ学ぶ権利を担う経済科学の総合雑誌

経済科学 通信

2000. 8 No.93

981年5月20日第4種郵便物認可
ISSN 0385-065X

環境・市民・公共事業

総選挙／財政赤字／東京都銀行税／有珠山噴火
沖縄サミット／オーストリア／東ティモール

経済科学通信

Letters of Economic Science

第93号 (2000年8月)

TOPICS

2000年総選挙／財政赤字と代替戦略／東京都の「銀行税」／有珠山噴火と防災
研究／沖縄とサミット／オーストリア情勢／東ティモールと援助

2

SPECIAL EDITION
特集

環境・市民・公共事業

21世紀の環境問題と社会経済システム	植田 和弘	15
長良川河口堰による環境破壊と建設省の責任	粕谷 志郎	21
徳島・吉野川第十堰問題その後 ——住民投票からポスト住民投票へ——	K・U	28
公害被害者とともに進める環境再生のまちづくり	傘木 宏夫	31
環境評価の方法 ——航空機騒音を対象に——	友野 哲彦	36
グリーン調達進展とISO14001認証取得の「ドミノ倒し 現象」	佐古井一朗	42
遺伝子組み換え作物と地球環境問題	江尻 彰	47
環境の世紀における将来社会構想 ——脱物質化革命で雇用と仕事が変わる——	佐々木 建	53
エゴからエコへ ——「自己」の拡張と人間の発達——	藤岡 惇	58

政治学入門

丸山眞男と「自己内対話」	富田 宏治	67
--------------	-------	----

現代社会批評

新たな社会システムへむけて ——愚か者の合理性——	藤山 英樹	72
---------------------------	-------	----

書評

石田和夫・安井恒則・加藤正治編『企業労働の日英比較』／大橋範雄著『派遣法の弾力 化と派遣労働者の保護』／神野直彦・金子勝編『「福祉政府」への提言』／松尾匡著『標 準マクロ経済学』／武藤一羊著『ヴィジョンと現実』		80
---	--	----

誌面批評		94
------	--	----

基礎研だより		96
--------	--	----

エゴからエコへ

—「自己」の拡張と人間の発達—

基礎研編『人間発達の政治経済学』（青木書店、1994年）は、基礎研の人間発達論の一つの到達点であった。その出版の折りに、私は同書のよって立つ人間（発達）観のあいまいさを批判し、「近代個人主義の人間観を超えていく」ことが、こんごの共通の課題となると述べた。本稿では、その論点を発展させ、21世紀を「環境＝いのちの世紀」にするためには、「人間（発達）観」はどう変わればよいかを論じる。「自己の拡張」とおして「エゴ」から「エコ」への転換をめざすことこそ、新世紀の人間発達の課題であり、そのために、マルクスとガンジーを重ねあわせていく必要を提唱する。



FUJIOKA Atsushi

藤岡 惇

……生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。

（灰谷健次郎『太陽の子』）

……私たちが、[万物の霊長たるにふさわしい] 雅量をもつようになるとき、……私たちには、……「高貴な身分には義務が伴う」ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。

（E・F・シューマッハー『スモール イズ ビューティフル』）

I はじめに

— 2つの質問 —

本稿の読者の皆さんは、環境問題の解決を火急の最重要課題だと、すでに本気で考えておられるものと前提します。したがって、環境問題の切実さの論証といったテーマはすべて省略します。ま

ず読者の皆さんに2つの質問をさせていただきます。

雄波派、それとも雌波派？

『モリー先生の最終講義』という本があります。社会心理学者のモリー先生が、臨終の床で教え子に「いかに生きるべきか」を語った本ですが、その末尾で次のような「波の寓話」を紹介しています。

「小さな雄波が砂浜の沖の大洋で、飛び上がり、飛び下がりしながら楽しんでいました。突然に雄波は、自分がやがて砂浜に碎け散るだろうと悟りました。この広い大洋の中を、彼は今や砂浜めがけて進んでおり、間もなくそこでなくなるでしょう。『こりゃいかん。俺はどうなるんだ？』と雄波は渋い、暗い表情でつぶやきました。そこへ同じように、飛び上がり、飛び下がりしながら楽しんでいる雌波がやってきました。雌波が雄波に言いました。『なんでそんなにしょげてるの？』雄波は『わかっちゃいないんだな。君はあの砂浜で碎け散って、おしまいになるんだよ』と答えました。すると雌波が、『あなたこそわかっちゃいないんだわ。あなたは波じゃないわ。大洋の一部

よ』と言いました。』

この寓話を引いてモリー先生は「わたしもそう信じています。わたしは一つの波ではなく、全人類の一部です」と述べ、自分は雌波派だと告白しています²⁾。さて、読者の皆さんは、雄波派ですか、それとも雌波派ですか。

エゴ派、それともエコ派？

第2の質問に移りましょう。あなたの生命ないし能力は、あなたの私有財産ですか。それとも誰かからあなたに託された信託財産ですかという質問です。マハトマ・ガンディの孫のアルンさんから教えてもらった質問です³⁾。おそらく雄波派の人は私有財産と答え、雌波派の人は信託財産と答えるのではないのでしょうか。本稿では、前者（雄波-私有財産派）の立場の人を総称してエゴ派、後者（雌波-信託財産派）の立場の人をエコ派と名付けておきます⁴⁾。

ところで、このように聞かれたらあい、多くの読者は、当惑されるのではないのでしょうか。なぜなら、大概の人は、実際のところ、エゴとエコの2つの魂をあわせ持っているからです。戦場や企業間競争の現場では、エゴ派として行動しないと生き残れません。その同じ人が、家庭や恋人のもとに戻ると、利他的なエコ派として行動するという風に。

Ⅱ 私って何？

— 「自然法」がとらえる

生物=人間界の掟—

上記の2つの質問は、結局のところ、「人間って、私って、何なの？」という問いに帰着します。人間って、私って、何なのでしょう。

いのちの尊厳、人間の尊厳

ここで、手をかざしてください。怪しげな宗教ではありませんから、ご安心を。手を光にむけてかざしてください。手の先、指のあたりがキラキ

ラときれいに輝いていますね。この手を生物の進化図にたとえようと、人間はどこに位置しているのでしょうか。

話は、140億年前のビッグバンの直後にとびます。当時は余りに熱いため、宇宙には、もっとも単純な元素-水素とヘリウムしか形成されませんでした。それが宇宙の冷え上がりとともに、星間塵ゾーンのそこかしこで、より複雑な元素-たとえば炭素や鉄などが生まれ、その土台のうえに複雑な分子の有機的結合体（有機物質）が生まれてきたのです。「君たちは、星のかけらだよ」⁵⁾と天文学者が説くには、道理があるのです。

地球上の海のなかで、36億年近くまえに最初の生命体が生まれたといわれます。その後の26億年間は、細胞分裂という無性生殖が、生命の繁殖の唯一の方法でした。そこでは個体の死はありません。細胞分裂による永遠の生を謳歌していたのです。雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生みだすという有性生殖がはじまって、個体の死が始まりました。生物は、セックスの喜びの代償として、死の恐怖を味わうようになったのです⁶⁾。

それはともかく、有性生殖の積み重ねのなかで、子供に引き継がれるDNAはいっそう高度で複雑なものになり、その精華として人類が誕生します。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」を生み出したのです⁷⁾。一人の人間のなかに60兆の細胞がすばらしい協同の活動をして、人間活動を支えています。よく生物学者は、「人間とは36億年のDNAだ」と述べますが⁸⁾、一人のなかに含まれるDNAの総延長は、1080億km-地球と太陽を360回往復する長さになるといいます⁹⁾。ビッグバン直後の水素とヘリウムしかない状態から、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげたのです。

いのちはなぜ尊いのでしょうか。わけても人間のいのちは、なぜ尊いのでしょうか。60兆の細胞が、1千億kmのDNAに導かれ、えもいわれぬ精妙な協同活動をしており、自らの力で、宇宙の最高の精華としての光を発しています。尊いのは当たり前なのではないのでしょうか。

オカルト・神秘主義にならないカギ

生きるとは生命の移しかえのことです。すべての生命は曼陀羅絵のように、つながっています。このような宇宙の物質系と生命系の自己発展・進化の姿を、最新の科学は見事に浮き上がらせてくれます。しかし事物を分断し、固定的にとらえる機械的な唯物論に立脚しては、なぜこのようなダイナミックな変化が生じているのかを説明できません。そのために不可思議な「霊」の力に頼って変化を説明しようとする「エコロジスト」が生まれ、オカルトや神秘主義を流行らせているのです。

オカルトに走らないカギは、唯物弁証法の立場で自然界を把握しようとすることです。F. エンゲルスの遺稿の『自然弁証法』、宇宙の物質系に備わる自己組織化の本性から、生物進化を捉えようと試みている米国サンタ・フェ研究所の仕事¹⁰⁾などを研究されるといいと思います。

自然の掟に従うということ

地球村の高木善之さんが説いているように、36億年の進化の歴史のなかで、生物たちは、生存持続のための掟を育んできました。必要最小限という掟と調和・共生という掟が、それです。動物たちは互いに必要最小限の資源・獲物しかとらず、他の動物たちとの無用の争いを避けてきたのです。これが、いわば自然の掟（自然法）です。

ところが、人間（世界人口の2割を占める先進国の、とくに大資本家）は、自らが自然的動物であることを忘れ、自らを自然の外部に置き、自然法に反する社会の掟を作るようになったのです。必要最大限という掟と競争という掟がそれです。まさに自然法とは正反対の内容です。

人間は慎みを忘れ、やり過ぎたのです。その結果、自滅する一歩手前まで来たのです。自然の掟に従う方向で、社会法と社会システムを作り直すことが、人類最大の課題となってきました。新世紀の人間発達には、このようなパースペクティブのもとで考察される必要があるように思います¹¹⁾。

Ⅲ 人間の発達とは 「自己の拡張」のこと

基礎研の文献には、「自己実現」が人間発達とほとんど同義で使われています。このばあいの「自己」とは何なのでしょう。人間発達とどのような関係があるのでしょうか。

自己の範囲

「自己利益」を追求するといいますが、そのばあいの「自己」とはビリヤードの玉のように固い孤立した実体ではありません。「自己」の範囲は、人間の発達段階が高まるにつれて、しだいに広がっていくものだと、米国の未来学者のヘーゼル・ヘンダーソンは力説します。彼女が作成した別掲の図表をご覧ください¹²⁾。

赤ん坊から幼児の時代には、自己利益にかかわる「自己」の範囲は、文字通り本人一人だけのことです。要求を貫くために、あたりかまわず泣き叫ぶ赤ん坊の姿をイメージしてください。通常の人のはあい少年期になると、家族が「自己」利益の範囲に入ってきます。青年期になると、「自己」の範囲がコミュニティや企業団体まで広がってきます。成熟期に入ると、民族、国家まで「自己」の範囲に入り始めます。さらに視野が広い人のはあいは、動植物や死んだ人、未来世代、地球の運命までが「自己」のなかに入ってくるのです。地球市民、宇宙市民への成長の道筋を示唆する彼女の議論は、さすがにスケールが大きいですね。

それはともかく、自己の範囲を本人のところに限定する新古典派経済学は、幼年期の発達段階に照応した経済理論だと彼女は述べています。幼年期を超えて人間が「自己」を拡張し、発達をとげていく展望を閉ざしてしまう経済学になっているのです。

自己拡張の条件(1)

— 自己分析と自己受容 —

それでは、自己を外部世界に開き、拡張していくには、どうしたらよいのでしょうか。権威的なタテ型社会では、「自己のあるべき像」が上から押し付けられることが多いですね。このような「押し付けられ」をまず拒否することです。そのうえで一人になって、とことん狭義の「自己」に向き合い、「あるがままの自己」を受け容れるのです。自分自身を受け容れた時にはじめて、人は

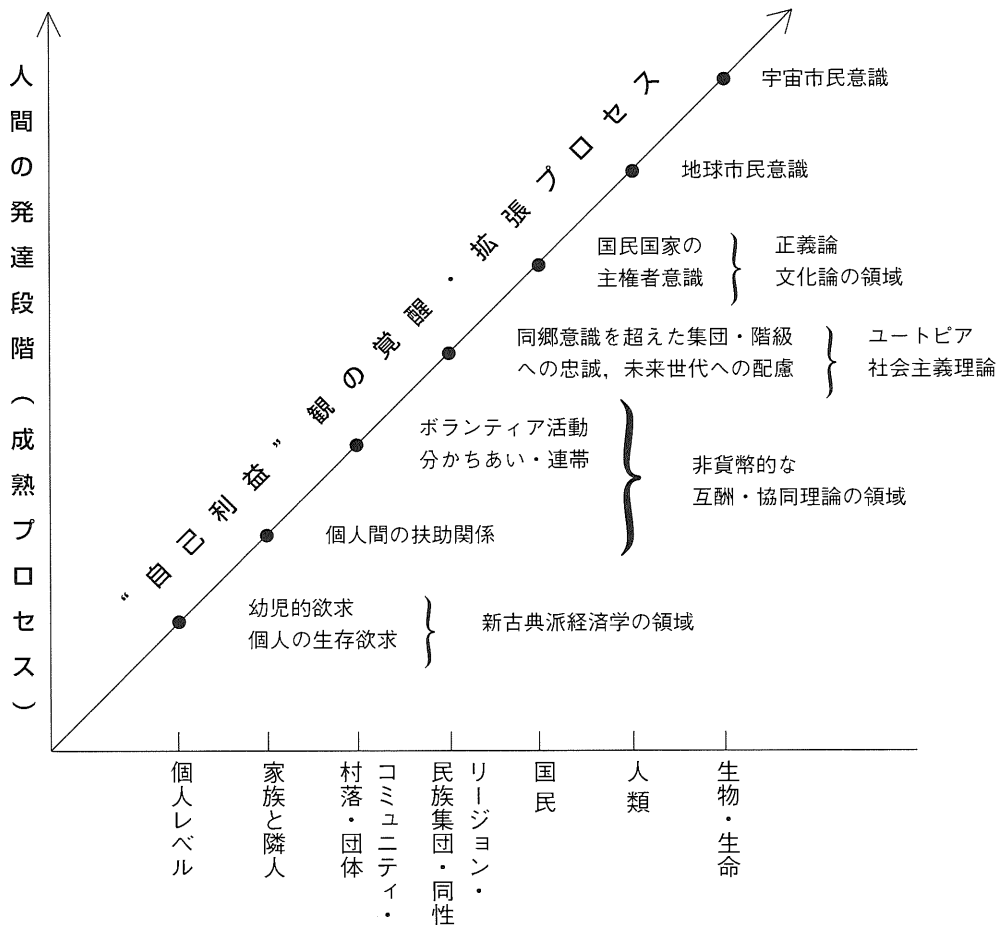
いのちのパワーを強めることができ、自らを変えることができるのです。自然によって信託された自己の能力を使いきるように努力することができます。自己を拡張するための原点は、パン種としての狭義の「自己」を確立し、受容することなのです。ことの道理は、内発型発展の立場にたつ地域開発理論とそっくりですね¹³⁾。

自己拡張の条件(2)

— 外部の世界への本物の関心 —

人は自分を好きになって初めて、他者も信頼で

図表 人間発達の視点からみた「自己利益」観の覚醒・拡張のプロセス



“自己”の範囲の各レベル

出所) Hazel Henderson, Building A Win-Win World, 1995, p.154を一部改作

きるようになります。そうすると関心が自然と外部世界に向かっていくのです。外部の世界に本物の関心(愛情)を寄せること—それが、狭いエゴを脱し、自己を拡張していくもう一つのカギとなります。

哲学者のバートランド・ラッセルは、『幸福論』の末尾で次のように書いています。「私たちが外部の人々や事物に本物の関心を寄せるようになると、自己とその他の世界との対立は、ことごとく消散する。そういう本物の関心を通して、人は、自分が生命の流れの一部であって、ビリヤードの球のような固い孤立した実体ではない、ということを実感するようになる。……そのような人は、自分は宇宙の市民だと感じ、宇宙が差し出すスペクタクルや宇宙が与える喜びを存分にエンジョイする。また、自分のあとにくる子孫と自分は本当に別個な存在だと感じないので、死を思っただけで悩むこともない。このように、生命の流れと深く本能的に結合しているところに、最も大きな歓喜が見いだされる」と。ラッセルもまた、ヘンダーソンと同様に人間が「宇宙の市民」にまで成長していく展望を語っているのです¹⁴⁾。

エゴ・シングル主義者が多いのはなぜ

日本では、エゴ・シングル主義者—「自己の拡張」が、幼年期のレベルで止まってしまった人たちが、なぜこれほど多いのでしょうか。成功(お金)に飛びつこうと、上だけを見て、跳ねる「びよんぴよんウサギ」に、されてしまったからだと思えます。

手のひらで人間の位置を示す先のたとえ話に戻りますと、指先が、「びよんぴよんウサギ」にされてしまったのです。そうすると上しか見えなくなりますから、指どうしが、共通の根をもっていること、ともに共通した生命の流れの産物であることが見えなくなります。宇宙における自らの位置と価値とを見失うのです。自他分離の人間観が支配します。そして人は自らの意志では生まれることもできず、生命の流れを任意にコントロールできないにもかかわらず、自己の生命と能力とを己れの私有財産だと考えるようになります。観念論の考え方に侵されるのです。

頭脳は、肉体を「所有」するべく、さまざまな指令を発しますが、生命の自然な流れのコントロールなど、できるわけはありません。生命の自然な流れの産物として、意識の方が発生してきたのですから。「心臓よ、生まれ」と頭で命令しても、心臓はいうことを聞きませんね。したがって観念は空回りし、精神病理が蔓延し、子供たちは引きこもったり、ストーカーになったりするので。「ありのままの自然」の受容を説く唯物論的な森田療法に、効き目があるのも道理です¹⁵⁾。

しかし、エゴ・シングルへの道が、シングル化の唯一の道ではありません。シングル化のもう一つの道—伊田広行さんのいう「スピリチュアル・シングル」に成長する道もあるからです。「私の命は、全宇宙の命、生命体系・自然の摂理の一部であることに覚醒した状態」のシングル主義のことです¹⁶⁾。シングルとしての自己と徹底的に向きあい、対話するなかで、外部世界への本物の関心が生まれ、エゴからエコへと自己を拡張するなかで「スピリチュアル・シングル」への道は切り開かれます。そして、これこそ、新世紀の人間発達の姿だと思います。

Ⅳ 環境=いのちの世紀に 経済学はどう変わるべきか

……変えることのできるものを変える勇気と、
変えることのできないものを受け容れる心の
優しさと、
いずれであるかを見分けることのできる叡智
を
私に与えてください。
(ラインホルド・ニーバー『平安の祈り』か
ら¹⁷⁾)

21世紀は、「環境の世紀」になるといわれます。ただし環境の世紀と「いのちの世紀」とを等号で結ぶ必要があると私は考えています。なぜなら、環境は人間の作り出した経済システムの一部ではないからです。そうではなく環境というのは、40

億年近い地球のいのちの流れのことであり、そのような環境=いのちのシステムの内部の片隅に経済システムが生まれてきたからです。

さて、どうすれば、エゴ派をエコ派に変えることができるのでしょうか。そのために経済学はどのように変わる必要があるのか。最後にその点を考えてみます。

自然法にもとづく命の流れの内部に 人間・経済を位置付ける

「身土不二」という言葉があります。「わが身とそれを支える大地とは一体だ」というほどの意味です。この「土の力」について、画家の宮迫千鶴さんは、次のように書いています。

「では土を忘れる時、私たちの心身はどうなるか。……土を忘れることによって、『いのち』が生から死へ、死から生へと循環しているものだという自然の原理を私たちが忘れてしまう。たとえば雑木林の落ち葉ははらはらと落ちて土になり、その土は腐葉土として新し植物を育てるように、私たちの死は新しい世代の生につながっていくのだが、その『いのちのつながり』が見えなくなると、……『自己の人生を満たされたものとして眺める』足場がわからなくなるだろう。私たち人間は、社会的動物であると同時に自然的動物であるが、この『自己の人生を満たされたものとして眺める』ためには、社会的であるだけでは充分ではなく、むしろどれほどおのれの中に自然性を見つけたかということが重要になると私は思う。その自然性を見つめるための貴重なメディアが土である。つまり土は『いのちの墓場』であり、同時に『いのちの養育場』なのであるが、そのことを魂の深層で納得している人と、そうでない人の精神の落ち着きには、きっと大きなへだたりがあることだろう。」¹⁹⁾

これまで基礎研では、「人間を社会的動物」として捉え、その角度から人間発達を論じてきたように思います。しかしそれだけでは今日では決定的に不十分です。「社会的動物」である前に、人は「自然的動物」です。それに自然界の掟（自然法）に反して社会の掟（社会法）が暴走し、矛盾が極限にまで来ているのが、現代の特徴だからで

す¹⁹⁾。

新世紀の経済学は、エコロジー的な視角を土台にすえ、まずは人間を「大地の子」、「動く木」として捉えることから始めることが必要です。そのうえで、自然法にそった経済システム再建を考えていくのです。エコロジー的な視角を土台にすえるということは、人間社会を自然環境の内部に置き、その一部として研究することを意味します。「宇宙船地球号」内のシステムとして経済を位置づけることを意味するのです²⁰⁾。これまで基礎研では、地域経済の内発型発展といったテーマを研究してきましたが、こんごは「バイオ・リージョナリズム」（生命系地域主義）という視角に立つて研究することが求められるでしょう。

自然的動物としての人間の発達の重視

したがって自然的動物としての人間の発達のありかたにもっと注目する必要があります。その点で参考になるのが、龍村仁さんの映画『ガイア・シンフォニー』です。その第2部で、素潜りで深海100メートルを潜るというジャック・マイヨールが登場します。カリブの海でイルカと暮らしているあのマイヨールです。

魚は脈拍を格段に落とすことで、深海での生活に適應しているといえます。これにたいして、自然との闘争意識が強く自意識が過剰な人間は、潜るほどに緊張を高め、脈拍数を増やしてしまいがちです。そのためにすぐに酸素不足に陥り、10メートルも潜ることができません。ところがマイヨールのばあい、「普段毎分60回である脈拍数は、水深100メートルのあたりでは、毎分30回に落ちている。圧縮されて働かなくなった肺にかわって肝臓や脾臓から直接に脳や心臓にむかって、不必要な場所に残っている赤血球を送りこむ血流が生まれている。活性化した細胞や組織が『私』の意識を通過せずに、自然に、生き続けるための最大限の力を発揮している」といえます。深く潜るコツは、過剰な自意識から自らを解放し、自然（魚）の摂理に同化することだということです。動物的基盤に戻る（ないし高次復活することによって、逆に人間的能力が十全に発揮されるという話は示唆的ではないでしょうか²¹⁾。

人間が作り出すものと 人間を作り出すものとの区別

人間が作り出すもの、再生産可能なもの、死んだモノは、人間が自らの意志のもとに置き、コントロールすることができます。このような財貨は、所有し、商品として売買しても大過ないでしょう。

しかし、人間を作り出すもの—人間を生み出し、死なす悠久の生命の流れ、人間の生命そのもの（臓器などを含む）、悠久の大地などは、再生産可能な財貨とは性格を異にしています²²⁾。人は大地や自己の生命の流れを「所有」していると考えても、それはあくまで主観の思いこみにすぎません。逆に神戸の大震災や有珠山の噴火が教えているように、大地がそこに住む人間を所有しているのです²³⁾。自らの意志にかかわりなく生まれ、死んでいかざるをえないように、自然の生命の流れの方が、人間を所有しているのです²⁴⁾。これが唯物論の基本原理です。

したがって、金子勝さんの説くように²⁵⁾、生産の本源的要素たる土地、労働、貨幣（ないし信用関係）については、商品化を規制するなど、再生産可能な他の財貨とは異なる扱いをする必要があります。何が変えることのできるもので、何が変えることのできないものかを見分けることができる「叡知の経済学」、ものづくりの経済原理より生命原理と人間発達原理を優先する「生命と人間中心の経済学」を創造していきたいものです。

自他分離を止揚する協同の場づくりの実践

観念のなかだけで自他分離のエゴ意識を克服することはできません。そのためには、ムーブメントが必要であり、運動を展開する場（空間）が必要です。生命学者の清水博さんと独立法人制で有名な前川製作所の社長さんの対談集『競争から共創へ—場所主義経済の設計』（1998年、岩波書店）は、この点で、実に示唆的な本です。

清水さんは、自他分離を実践的に止揚する空間のことを「場所」と名づけ、前川製作所やワークーズ・コープの事例などを素材に、どのような

質の「場所」があれば、自他分離を実践的に止揚していけるのかを検証しているのです。そして自他分離を止揚していくパワーを秘めた経済システムのことを「場所主義経済」と名付け、そのための新たな経済学の構築を呼びかけています。

「場所主義」とは、私には共産主義のことだと思われてしかたありません。自他分離を実践的に止揚する共同空間（家族、コミュニティ、非営利団体、民主的経営など）をどう組織していくか。この営みを保障し、支援するシステムとして共産主義を再定義すれば、どうでしょうか。そのための理論と実践を深めるなかで、共産主義の理論が蘇ってくるのではないのでしょうか。この点は問題提起に止めますが、ぜひ誰かに深めてほしいテーマです。

先住民族、死者・未来世代、生物 との支えあい

大量生産・大量廃棄の資本主義文明は、あまりに退廃し、袋小路に入りこみましたので、現存メンバーの力だけでは、文明を刷新できないかもしれません。歴史上、そのような自浄能力・自己革新能力を失った文明は、自滅の道を歩みました。

ただし、汚染されていない「未開の民族」との接触が、袋小路に陥った文明を救ったこともありました。エンゲルスによれば、古代ローマ帝国の奴隷制文明を救ったのは、ゲルマン（ドイツ）の未開民族でした。古代ローマ末期の「ヨーロッパを若返らせたのは、……ドイツ人の未開性、彼らの氏族慣習、彼らが生きていた母権制時代の遺産[であった]。……じっさい未開人だけが、瀕死の文明に苦しむ世界を若がえらせる能力をもっている」²⁶⁾

日本列島や新大陸の先住民たちは、大地を私有財産とは考えず、「未来世代」からの信託財産と考えてきました。彼らとの交流は、エゴ派の心情を揺り動かし、彼らをエコ派に転換させる触媒となる可能性があります²⁷⁾。沖縄在住の小説家灰谷健次郎は、『太陽の子』のなかで、「生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ」と語ら

せていますが、沖縄の基地闘争に参画しているのは、現存世代だけではありません。沖縄住民の1/3に及んだ死者たちの声、さらにはこれから生まれる子供たちへの社会的責任の感覚が、生きている者を動かしているのです。辺古野のジュゴンやオオタカといった生物たちもまた、生きている者の心を動かしはじめています。地球市民意識に根ざす人々が中心になる運動は、このような幅の広さが特徴です。このような社会運動に参画することによって、地球市民意識がいつそう覚醒され、エコ派が育っていくのでしょうか。

賛成できないエコロジー思想の潮流

百花繚乱のようなエコロジー思想のなかには、単純に賛成できないものも見られます。オカルトと神秘主義に流れる観念論の潮流については、繰り返しません。

いま一つは、エコ・ファシズムともいうべき潮流です。他の生物とは異なる人間の特性、万物の霊長としての特質を無視ないし軽視するのは、生物界の利益を人間の利益に優先させ、第三世界民衆に人口減を強要したり、江戸時代の生類憐みの令の再版のような運動を展開しています。「アース・ファースト」（地球第一）の運動や一部のアニマルライツの運動に、この傾向を感じます。人間には、「万物の霊長」として「高貴な身分には義務が伴う」ことを自覚する能力と可能性があることを彼らは信じないのです。

いま一つは、資本主義が潜在的に用意してきた人間発達のための諸条件の活用を軽視し、単純に「昔に帰れ」、「自然に戻れ」と主張する潮流です。この潮流には、人間を自然的動物の側面に一面化する傾向が伴っています。資本主義が用意してきた「適正な」生産力や技術の体系、人間が作り出す財の分野への商品経済の導入、人間がシングルになっても生きられる条件などを民主主義的に活用し、人間発達を促進していくという道が、この潮流のもとでは断ち切られてしまいかねません。

マルクスとガンジーの重ねあわせを

英国の思想家のシューマッハーは、マハトマ・

ガンジーとマルクスの影響のもとで、エコロジーを基盤にした「人間中心の経済学」の構築を試みた人物です。彼は、ガンジー主義を経済学の分野に具体化した理論家だといえるでしょう。彼が提唱した適正技術論（あるいは中間技術論）は、地域住民の内発的な発達課題とかみあった技術や生産力を導入しないことには、住民の発達に役立たないというものでした。じっさい、大学の数学の教科書を小学校の算数のクラスにもちこめば、どうなるかは明らかでしょう。しかし当時のソ連では、冷戦対抗という軍事的必要から、地域住民の発達課題とは無縁な生産力や軍事技術を導入することが、国家的至上命令となっていました。したがってシューマッハーの経済学は、当時のソ連マルクス主義によって峻拒されました。

幸いなことに、そのソ連も消滅しました。ソ連の影を脱することで、民衆の運動は、いま新しい息吹につつまれています。1999年12月のシアトルに次いで、2000年4月にワシントンで反グローバルバリエーションの運動が未曾有の高揚を示しました。どこでもエコロジスト・環境運動家が、基軸の役割をはたしています。

この新たな民衆運動を支えている原理は、私の見るところ、(1)環境と生命の利益、家族と地域の利益を市場と資本の論理に優先する、(2)経済民主主義、(3)非暴力・市民的不服従です。経済グローバルゼーションに対抗するこの運動のもっとも卓越した理論家は、デービッド・コーテンであり、バンダナ・シヴァであり、ラルフ・ネーダーでしょう。そして彼らの理論的基盤は、マルクスとガンジー（そしてシューマッハー）なのです。

マルクスとガンジーとを創造的に重ねあわせることで、地球市民、宇宙市民への成長の道筋を指し示す経済学を創ってはいこうではありませんか²⁸⁾。

- 1) 藤岡惇「近代個人主義の人間観をどう超えるか」『経済科学通信』第78号、1995年4月。
- 2) モリス・シュワルツ『モリー先生の最終講義』1998年、飛鳥新社、141～142ページ。
- 3) 関連して、諸富祥彦『どんな時も、人生にYESと言う』1999年、大和出版、124～125、130～132ページ。

- 4) ミヒェル・エンデの『モモ』という童話(岩波書店)は、現代世界の基本対抗を見事に描きだしている。エンデは、エゴ派の人間類型を「時間泥棒」の「灰色の紳士たち」に代表させる。エコ派は、モモを代表とする無邪気な子供たちである。『モモ』のメッセージをうまく経済学的に表現できれば、経済学は立派に生き返るであろう。
- 5) 佐治晴夫『宇宙の風に聴く — 君たちは、星のかげらだよ』1994年、かたつむり社、海部宣男『宇宙史の中の人間』1993年、岩波書店。
- 6) ウイリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』1997年、三田出版会。
- 7) F.エンゲルス『自然弁証法』邦訳全集版20巻、352ページ。
- 8) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と、たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」(柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社、1991年、6ページ)。
- 9) 村上和雄『サムシング・グレート — 大自然の見えざる力』1999年、サンマーク出版、136ページ。
- 10) スチュアート・カウフマン(米沢富美子監訳)『自己組織化と進化の論理』1999年、日本経済新聞社、16～17、24、35ページ。
- 11) 高木善之『地球大予測』1998年、サンマーク出版、140～141ページ。
- 12) Hazel Henderson, Building A Win-Win World, 1995, p.154
また関連して H. Henderson, Paradigms in Progress, 1991 [ヘイゼル・ヘンダーソン『地球市民の条件』1999年、新評論]も参照。
- 13) 岸見一郎『アドラー心理学入門』1999年、KKベストセラーズ、103～106ページ; 諸富祥彦『カール・ロジャーズ入門』1999年、星雲社、144、162～163ページ; 伊田広行編著『セックス・性・世界観』1997年、法律文化社、180～183ページ。
- 14) パートランド・ラッセル『幸福論』1991年、岩波文庫、273ページ。
- 15) 森田正馬『生の欲望』1999年、白揚社、49ページ。
- 16) 伊田広行「スピリチュアル・シングル — 生き方と社会運動の新しい原理を求めて(3)」『大阪経大論集』50-3、1999年、323ページ。
- 17) 鈴木有郷『ラインホルド・ニーバーとアメリカ』1998年、新教出版社、139ページ。
- 18) 宮迫千鶴「土の力」『読売新聞』1996年6月の記事より。
- 19) 高木善之『地球大予測』1998年、サンマーク出版、第4楽章。
- 20) 岩佐茂『環境の思想 — エコロジーとマルクス主義の接点』1994年、創風社、118～119ページ。
- 21) 龍村仁『ガイア・シンフォニー間奏曲』53ページ; ジャック・マイヨール『海の記憶を求めて』1998年、翔泳社、また藤岡惇「ガイア・シンフォニーと人間発達」『基礎研ニュース』23-4、1997年11月も参照。
- 22) 中村尚司『地域自立の経済学』1993年、日本評論社、13～15ページ。
- 23) 山口健治『土地は公のもの — 私権制限が繁栄の第一歩』2000年、大蔵財務協会、162ページ。
- 24) 渡辺和子『愛をこめて生きる』1989年、PHP文庫、46ページ。
- 25) たとえば金子勝『反経済学』1999年、新書館、142ページ。
- 26) エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』全集版21巻、156～157ページ。
- 27) この点にかかわって、沖縄の歌手の喜納昌吉は、こう書いている。「沖縄とネイティブには自由がないが、平和がある。アメリカと日本には自由があるが、平和はない。私たちはこの溝を埋めねばならない」(鎌田東二/喜納昌吉『霊性のネットワーク』2000年、青弓社、参照)。
- 28) たとえば、英国シューマッハー協会リーダーのジェームズ・ロバートソン(石見尚訳)『21世紀の経済システム展望』1999年、日本経済評論社のエコ税制提案などは、興味深い。基礎研関係者では、小沢修司『生活経済学 — 経済学的人間的再生へ向けて』2000年、文理閣が、シューマッハーやイリイチの所論を紹介し、評価を試みているが、十分とはいえない。

(ふじおかあつし 所員 立命館大学)